

指定都市市長会シンポジウム in 札幌 大臣メッセージ 講演録（原文）

改めまして、皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました、橋本聖子でございます。本日は、指定都市市長会シンポジウム in 札幌、スポーツとまちづくり、こうして多くの皆さまにお集まりをいただきまして、きょうはお招きをいただき本当にありがとうございます。林市長さんにも札幌までお越しをいただきまして、全国の市長会の皆さま方にもお越しいただいているということで、私はこの北海道の生まれ育ちでありますので、私からもお越しいただきました皆さま方に感謝申し上げます。ようこそ、北海道にお越しいただきました。残念ながら、林市長は帰られるんですね。札幌の夜を楽しんでいただきたかったんですけども、とても残念ですけれども、でも私も実は久しぶりに北海道に来て、きょうは札幌ドームで大運動会の 2 キロの駅伝に出てきました。きょうは、このオリンピアンで走ったんですよ。すごく楽しく走らせていただきました。きょうは、この前には大倉山のオリンピックミュージアムでオリンピアンのサロンが開設をされたということで、オール・オリンピアンズのまずサロンをつくっていただいたということを、本当にうれしく思います。

私は、鈴木さんと言い出しちゃで小さな会を始めていきたいと。実は、全国には、今は鈴木大地長官が会長を務める、オリンピアンズ協会というのがありまして、歴代のオリンピアンの方たちが集まるオリンピアンズ協会というのは存在するんですけども、北海道はそれと同時に全体のオリンピックの会をつくっていこうということで、スケートから始まったことですけれども、スキー、そして夏も冬もということで、オリンピックのオリンピアン、パラリンピックのパラリンピアン、そしてスペシャルオリンピアン、もう一つはろうあの方のデフリンピックのデフリンピアン、この 4 つの仲間たちで構成されて、オール・オリンピアンズというふうに名前を変えて、今は 451 ということで、まだまだ増えるようにしていきたいなというふうには思いますが、札幌市さんとはオール・オリンピアンズ協会が連携を取らせていただいて、各小学校、そして中学校にも出前授業、オリンピック教育、パラリンピック教育をさせていただくための出前授業であったり、オリンピックミュージアムに来ていただいて、画面を通じてオリンピック・パラリンピックの歴史を学んでいただくというような活動をしていただいておりまして、もうそろそろ全校に、札幌市内は全てに行き渡るようなことになるんだろうというふうに思います。そういう一つ一つの活動というものが、また、2020 年東京大会のレガシーの一つとして、2030 札幌冬季オリンピック・パラリンピックに向かっていけるような姿になれば、一番ありがたいなというふうに思っております。

きょうはオリンピック・パラリンピック担当大臣の立場からのメッセージということで、テーマをいただいたわけありますけれども、私は運命を今、実は感じているんです。と言

いますのも、東京大会は前回の 1964 年、昭和 39 年の 10 月 10 日がオリンピック・パラリンピックの開会式だったんですが、その 5 日前に北海道安平町という、おととしに胆振東部の大地震がありましたけれども、その一つであります安平町で生まれ育ちまして、スピードスケートをやっていたんですけども、私の父は元気で今も頑張って牧場におりますが、その父がオリンピック・パラリンピックの開会式をどうしても見たいということで、大変なプレミアムチケットを 2 枚手にすることができて、東京大会の開会式に見に行っていたんです。

それで、あの最終ランナーの広島県出身、そのときのコンセプトの一つが平和の祭典オリンピックですから、原爆投下された唯一の被爆国であるこの国から平和の火をともそうということで、広島か長崎の出身者の方を最後のランナーにしようということだったんですね。そして、結果的には広島県三次市出身の坂井義則さんが大抜てきを受けるんですけども、あの広島に原爆投下されたその日に生まれた方ということで、19 歳のランナーが最後のランナーとして競技場に入ってくる。うちの父とおばあちゃんは、なんと坂井さんが上がってくる階段のすぐそばに席があって、大感激をしていたそうなんですね。生後 5 日の私の顔も見ずに、その日に千歳空港から飛び立ったんですね。子どもの顔はいつでも見られるからということで引き返すこともなく、携帯電話もないですから空港で電話をしたら無事に産まれたということが分かり、「そうか良かった」と言ったというんですね。それで、5 日間、東京見物をしながらおばあちゃんと楽しんで、楽しんで、全然、私のことを想っていない。

そして、坂井さんが入ってきて、取り壊されたけれども、今は新国立競技場ができましたが、前の国立競技場のあの真ん中の聖火台に火がともされた瞬間に父は何を思ったか。これを言い聞かされて私はずっと育つんですけども、あの競技場の聖火台の火がともったその瞬間、あの聖火台の炎の中におまえの顔が浮かんだ。母は言っていました。ずっと言っていました。「見もししないで行つたくせに」というふうに言っていたんですけども、でも、生後 5 日でやっと私の名前を付けてくれまして、オリンピックの選手になるようにと聖火の聖の字を取って聖子になりました。

そして、小学校 1 年生の冬、札幌冬季オリンピックを見ることができて、うちの父が連れてきてくれましたときに、真駒内競技場のあの聖火台の火を見ながら、「おまえの名前はここから付いたんだ」ということで、スピードスケートでオリンピックの選手になるということを決意いたしまして、結果的に冬のスケートで 4 回、夏の自転車で 3 回ということで、合計 7 回ラッキーにもオリンピアンとして出場を果たすことができました。

そして、私自身のライフワークのような形で、このオリンピック・パラリンピックにずっと携わりまして、スケートの会長、あるいは自転車の会長、そしてオリンピック委員会の強化本部長であったり、副会長という立場で実は選手と合わせると 18 回経験しました。オリンピック・パラリンピック、そしていよいよ今度は、今年ということになるんですけども、

いろいろ携わって団長職もやりました。バンクーバーとソチと前回のリオデジャネイロ、ロンドンは副団長だったんですけれども団長を3回。まさに断腸の思いを3回もしまして。でも、本当に大変だったなというのと同時に、非常にいい経験をさせていただいたなというふうに思っております。

実は、一番、自分自身の財産になったオリンピックは全てなんですけれども、最後の選手として出場したアトランタ、このオリンピックは非常に勉強になった。なぜかというふうにいいますと、もう諦めが悪い人間なもんですから、最後にオリンピックのアトランタを目指そうという、31歳で迎えるアトランタを控えているときに、私の義理の兄が、この北海道選出の衆議院議員だったもんですから、あの兄の跡を継いで衆議院議員になるという準備は、実はしていたときだったんですけれども、そのうわさを聞き付けた、今は組織委員会の会長であります、森喜朗会長が「こちらのほうがいいぞ」ということで、参議院の全国区に誘いをいただきまして、それであればぜひということだったんですけれども、「来年のオリンピックを目指しているので、その後の3年後の会期にしてもらえませんか」と言ったら、「それはなかなか難しい」というふうに言われましたので、「じゃあどっちもを目指しますがいいですか」とずうずうしく言ってしまいまして、結果的にもちろん日中は政治活動、そして深夜と早朝の時間をかけて、自転車の全日本選手権を約10カ月間両立を目指しまして、アトランタオリンピック大会は7月の開催でしたけれども、5月の全日本選手権のトラック競技で優勝することができまして、まず出場権を取りました。

でも、国会が延長になると諦めなければいけなかつたんですが、ちょうど6月に閉会をいたしまして、そして7月のアトランタ大会に選手として出場を果たすんですけれども、オリンピックの基本というのはする人がいる、そして見る人がいて、支える人がいる、この三角形をしっかりと描いていくことこそが、スポーツの基本だといわれているんですけれども、私は最後のアトランタの大会はする人であり、そして政治家として行くもんですから視察だったり、あるいは自分の競技が終わってから滞在している期間は、アメリカの国会議員と、私自身も国会議員なので、オリンピック・パラリンピックのこの後のレガシーとか、事前のこととか、そういうスポーツ、まさにまちづくりや国づくりというものは何なのか、文化というものは何なのかということを、国会議員として話をするという機会をいただいたり、あるいは支えるほうも大事ですから、どのようにしてアトランタ大会は準備をし、そして次につなげていくのかというようなことも勉強させていただく、最大のチャンスだったなというふうに思います。

特に私の最後のアトランタで思い出ということではないんですけども、怖い経験は何といっても選手村のダイニングですね。食堂のすぐそばに置いてある、どこにもたくさん置いてあるダストボックスですけれども、ゴミ箱、その中に爆弾が仕掛けられておりまして爆発したんです。そして、死人は出なかつた、ちょうど成田さんが一緒に出ていた、あのオリンピックのときに爆発したんですよね。選手村の中のテロで死者は出なかつたんです。でも、

オリンピック広場と言われる、アトランタの中心部にある広場では爆発が大変大きくて、そして数人の死者を出したというような、これからのおリンピック・パラリンピックはテロとの戦いでもあるというような状況が、だんだんと見えてきた大会だったんですね。

そのときに、これからのおリンピック・パラリンピックというものを、どのように選手の安心・安全、そしてどういうふうにして文化として発展させていかなければいかないのかということを学んだおリンピックが、私の最後の選手として出場したアトランタ大会だったということなんですね。

一つ、きょう指定都市の皆さんにお集まりでありますので、これからのおスポーツというものと、どのようにまちづくりや、あるいはいかに心豊かで持続可能な社会をつくり上げていくことができるかということに関して、私なりの経験で一つの提案といいますか、そういうものを大臣という立場と同時に、今までの経験からして、ぜひお願いをしたいなということを、あと最後の20分の中でお話ししたいと思うんですけれども、実は7回のおリンピックに出た選手は、さぞかし頑丈な体だったんだろうと。当然、太ももが一番太いときは63センチでしたから、普通の女性のウエストより1本の太ももが太かった。それは、自転車のスプリンターだったときですね。スケートはみんなに太かったら駄目なんです。なぜか。短い足で63センチもあればコーナーができませんから、本当にそうなんです。コーナーができないので、私がスケートのメダルを取ったときは最後55センチの太ももにして仕上げていました。

自転車のスプリントはソウルのときだったんですけれども、これは63センチまで大きくして、短距離の戦いだったので、そういう体づくりをしてきたんですけれども、そういう足だったからこそ当然、頑丈な人間だと思われていたと思うんですが、実は小さい頃からずっと病気を持っていました、それが表ってきたのが小学校3年生の後半、最後4年生になる直前ですね。急性腎炎になりました、そして2ヶ月間の入院生活をして、そして再発を避けるために小学校が終わるまで、これはスポーツとは無縁の生活をしました。そして、その後、少しずつ復活ができて、高校に入る直前の中学3年生には、全日本のジュニアまで出られるように体も回復したんですけれども、そして高校に行きました。駒澤大学附属苫小牧高校、全道各地から優秀なスケーターが集まる高校でもあります、切磋琢磨(せっさたくま)されて、どんどん成長して高校2年生で全日本のチャンピオンになってしまいました。

そうしましたら、周りは家族も含めて、もう完全に病気は治ったんだというふうに思ってしまって、そこから1年もしないうちに検査も何もやめてしましましたんで、とにかく1年後にサラエボという靖さんが出た一緒にオリンピックですけれども、そのオリンピックに、もう全日本チャンピオンになっているので確実に出られるんだというふうに思いながら、一生懸命に高校3年生の春から夏にかけて、全力で苦しい、厳しいトレーニングに挑んでいたんですけれども、そうしましたら、なんと秋に体がむくみ始めまして、これはおかしいというふうに自分が気付いて良かったんです。それは、小学校のときのあの体験がありますので、もしかして、まさかと思いながら小学校のときに入院していた、苫小牧市

立病院に行きました。即入院だったんです。結果的に、このままではとても体が持たないし、オリンピックどころじゃないというふうに言われまして、尿タンパクの量が以上に上がっているということで入院をしたんですね。

でも小学校のときと違うのは、腎臓病という病気は、そんなにすごいひどい大変な病気なのかということを、高校3年生ですから調べちゃったんですね。自分で勉強したんです。どんどん恐ろしくなりまして、それが結果的に PTSD、当時その病名は付いていなかったので、ストレス性呼吸筋不全症というふうに診断書に書かれましたけれども、自分自身が怖くなってしまってストレスがたまって、結果的に胸の筋肉に障害を持ってしまって、いまだに深呼吸ができないものですから、ずっと腹式呼吸だけで生きている。これは、選手のときからもずっとそうなんです。でも、そういうふうな体であれば、体はそれに応えるしかないので、ずっと腹式呼吸だけで生きてきておりますけれども、肺活量は2,000ちょっとしかなかったですね。最大2,400までだったんですけども、病気をした直後は800シーシーまで落ちました。ずっと腎臓病の治療で入院しているのに酸素マスクを付けて、苫小牧の市立病院ではこんな患者さんは見たことがないと言われまして、そして札幌の病院にすぐ転院させられまして、札幌で入院していたんですけども、でも、そこで病は氣からということを学びました。

当然、腎臓は腎臓病のケアをするんですけども、呼吸筋不全症というのは自分自身のストレスを解消することができない中で病気になったものですから、まずは心療内科、当時の精神科病院に入りまして、そしてメンタルトレーニングを毎日、毎日。怒りをどうするかではなくて、もともと人間が怒りというものが体の中に発生しないように、どのように自分をコントロールするかというトレーニングを受けるんですね。私は結構、穏やかな人間だと思われていると思います。アスリート時代からも、まあまあ、そうですよね。それは、病気のおかげなんです。かあつとなったり、ストレスをためると、腎臓の数値が悪くなるんです。このときに始めて分かったんですけども、続発性慢性腎炎ということで、生まれ持つて何かにストレスがたまる、あるいは風邪や病気、けがをすると腎臓に負担が掛かってしまいややすい体ということが、そのときに初めて分かりました。

そして原因が分かったので、当然、そういうストレスをためないような訓練をすることによって、安定した数値を保ちながら今も腎臓と付き合っているという状況なんですけれども、一つ余計なものが付いたんです。高校3年生の札幌での入院中に医療事故に遭いまして、B型肝炎です。大変だったんですよね。そのときにも、もうどうにもならないということで、ずっとキャリアで来ていたんですけども、やっと3年ぐらい前、毎年のドックに入りながら、腎臓と肝臓のケアをずっとしてきたんですけども、やっとキャリアではなくなりまして、これも医学の力といいますか、本当にありがたいなというふうに思いながら、それでも今もずっとそのケアをするために血液のクレンジングという、ドイツの民間療法なんですけれども、私は一番それが今は合っていまして、血液クレンジングという透析の一

歩手前ですね。自分自身の血を抜いて、それはオゾンで、これが全部の方にいいかどうかは別として、私には一番合っている療法をやっと見つけることができまして、数年前から血液クレンジングというオゾン療法をやって、また自分の体にその地を戻していくというやり方で、民間療法なんですけれども、これをやりながら今もこれだけ元気でいるわけなんですけれども。

高校3年生のときに退院して、1年半後のサラエボにやっと間に合うんですけども、実はものすごい薬の量でした。その当時は申請をしてよかったです。それは、私自身の体がそういう診断を受けるので、生きるために必要だということで仕方なかったんですけども、そこから今度は4年後のカルガリーに出場するんですが、カルガリーのときには腎臓の数値も肝臓の数値も実は良くなっているときがあるので、絶対に薬はもう申請できないというふうになりますて、を目指すんであればこの薬を飲まないような体にするということが絶対条件がありました。そして、サラエボからカルガリーまでの3年間で、完全な予防医療・予防医学を徹底してチーム医療を組んでもらいまして、これは富士急行の堀内光雄会長という方が、大変素晴らしいオーナーで全面的にバックアップをしてくれまして、体質改善を試みて薬の量をIOCの反ドーピングコントロール機関が認める薬だけで復活することができまして、その薬だけは飲み続けましたけれども、ドーピング違反にはならずに7回連続で出場することができたんです。

私はそのことの思いがあるもんですから、12年前になりますけれども、25年前に国会に出たんですが、ライフワークはスポーツと健康、食。これをずっとやってきて、やっとたくさんの先生方の応援団をいただいて、12年前に国立のスポーツセンター、合宿所ですね。今は東京都北区にありますけれども、その完成に何とかこぎ着けることができました。そして同時に、その隣にスポーツ医科学情報、そういった研究所をつくることができまして、今は両輪のように回っているものですから、日本の選手たちの活躍が大変大きなものになつていったということなんですねけれども、昔は本当にそういったものがないのと同時に、合宿所とか遠征というのは単独でそれぞれが場所を決めてやっていたので、交流がなかったんですね。

これは非常にもったいないことでもあったんです。オリンピックに行って、冬のオリンピック、夏のオリンピック。でも、昔はオリンピックに行ったときに結団式で初めて会う選手たちばかりだったんですね。今は、もうみんな顔見知りになったのは、ナショナルトレーニングセンターで、全ての競技が冬も夏も合わせて一堂に会して、寝るところも同じ、練習のメニューは違うのでそれぞれトレーニングセンターでやっていますけれども、でも夜の時間は共有しますので、その共有する時間を見計らってアカデミースクールをつくって、あるいは監督、コーチ、スタッフのための授業を展開して、今は企業で言う当たり前のことですけれども、スポーツの異業種交流をこの12年間やってきたんですね。

そうするとこここの部分でのいいノウハウを、この教義でも生かしたほうがいいんじやな

いかということで、いろいろな人材の交流をすることによって、非常にいい状況になってきた。例えば、体操の競技に陸上のトップコーチが合宿に行くんですね。そうすると、どういうふうに、あん馬ですか、跳馬ですか。跳馬にたどり着くまでに何メーターかありますよね。そのときに、いかにトップスピードに上がるかという、陸上のスプリンターの専門家が付くことによって、一気にそのスピードが体操の選手は上がると。そうすると、ほんのちょっとの違いであったとしても、高く遠くに飛んで空中にいる時間が、ほんの0点何秒長くなる。そうすると、そこに一つ技が入るというんですね。それによって、最初の技のポイントを高くするための、最初をこの演技をやりますということのポイントを、最初から高くすることができますということであったりとか、たくさんいろいろな交流を図ることによって、選手たちのレベルを上げてくることができたわけなんです。

その中でスポーツドクターが集まってくださって、そして私たちの体を見ていただく、そのときに、きょうは藤田選手にお越しいただいておりますけれども、もともとはスピードスケーター、私と同じ競技をやって、事故によって両足の膝から下ですね。私も、ずっとトレーニングを、自転車競技連盟の会長ということだったものですから、ずっと一緒にやって強化に携わらせて、お付きをさせていただいているんですけれども、すごいなというふうにやっぱり思います。そして、その研究を医科学サポートセンターでやられるようになったんですね。そこで、さらに今は非常に高いレベルの研究を、あらゆる大学と組んでやらせていただいている。

その中で最近は、脳科学で眠り方の研究。これを突き止めていますと、なんと筋肉の疲労と脳の疲労が完全一致するということが研究で分かったんです。考えてみると、どこかに疾患を持っている、心臓に疾患を持っていたりとかというのは全く別として、筋肉の疲労をさせるためのトレーニングですから、そうすることによって栄養と休養を与えて、寝ている間に筋肉というのはつくり上げられるんですね。栄養と休養がなければ筋肉というのは絶対に太くなつてこないので、そういう研究が目に見えているので、練習が終わって20分以内の間にタンパク質を取らせないと、筋肉の補充が遅れていくものですから、食べる時間も研究もできているので、非常にいい効果が上がってきたということなんです。

そういう中で筋肉の疲労というものはどこから来るか、脳の疲労、そうすると筋肉に疲労を毎日、毎日、疲労困憊（こんぱい）になるまでトレーニングをしても、世界的に世界中でどこかに疾患がない限り、筋肉の疲労によって過労死した人は一人もいないんです。でも、脳の疲労によって過労死はあり得る。自殺もあり得てしまっている。これは、してはいけないことなんですけれども、こういったことは防げなければいけないんですけども、確実に起こってしまっている事実なんですね。これをスポーツのメカニズムからひもといいていきます。非常に簡単ではないです。簡単ではないんですけども、脳が疲労していない選手はどうやって回復することができるかということで、その大学とマットレスの会社と組みまして、脈拍を付けて、脳にセンサーを付け、マットレスの下にセンサーを引いて、そして

どういう先進状態で眠りについた人は、どれだけ眠り方が上手か、下手かという研究ができてきたんですね。

そうすると筋肉の疲労があっても、しっかりと脳がリフレッシュされて、あしたに向かっていこうというふうにして整理がちゃんとついている選手は、翌日の血液の中の乳酸値というのは、除去されているスピードがものすごく早いということが分かったんですね。悩み、悩んで寝ている選手は、何時間寝てもレム睡眠、ノンレム睡眠のサイクルがものすごい狂ってきてているので、何時間寝ても疲労は取れないんです。4時間寝ても、6時間寝ても、すつきりと目覚める選手というのは、疲労を非常に取ることができているということで、完全に脳と筋肉の疲労は一致していることが、この研究で分かったものですから、私はそこで強化本部長のときに、これをさらにひもといいていこうということで、障害者の選手とオリンピックの選手との違いということで、これをドイツが大変な最先端を行く研究をしているんですね。

そこで、オリンピアンとパラリンピアンの脳にセンサーを付けさせていただいて、それがどういう状況で脳は動いているのかということを研究していただいたことで、講義をしてもらったんですね。そうすると面白いということを申し訳ないんですけども、非常に面白い結果。健常者のオリンピアン、オリンピック選手のほとんどは超トップレベルでない限り、なんと一番刺激を与えてるのは左脳だけだったんですね。運動をつかさどる左脳。そして、藤田選手のようにパラリンピアンの選手の脳にセンサーを付けさせていただいたたら、ある程度のレベルまで、こちらは超トップ、でもパラリンピアンの超トップではなくても、なんと右脳も左脳も前頭葉も均等に刺激して運動しているということが分かったんですね。

これの一つ意味するところは、健常者のオリンピック選手は、自分自身の能力に甘えていいだけだということが分かったんです。これは、結果的に左脳で運動ができてしまうから、本当の自分自身の持つ治癒能力を引き出さない。自分自身が本当に持つ能力を引き出していないということに気が付いたので、脳トレをするようになったんですね。そうすることによって、ものすごく発達してきまして、そして大体脳科学者に聞きますと、前頭葉というものは25歳ぐらいから成長するというんですけども、そんなことはないそうです。しっかりとトレーニングをして、自らを鍛えようという自分自身を出していくことによって、あるいはパラリンピアンの選手のように障害を持ちながらも、自らを切り開いていこうという気持ちになった瞬間に、右脳は働くというんですね。そして、藤田選手もそうですが、私はいろんなパラリンピアンに聞きました。もともとあった足がなくなる、腕がなくなる。でも、脳はずっと分かっているので、なくなった足や腕の先まで感覚が分かる。これは、右脳でなければ分からぬらしいんです。そうですね。絶対そうですから。それを知らず知らずにやっているから、これだけすごい選手になれるという。

そのことによってスピリチュアルとか、科学技術、芸術文化というふうな、右脳が発達せざるを得ないそうなんです。それによって冷静な判断をしなければいけないという前頭葉

が発達をしてきて、そしてパラリンピアンというのは、あれだけのことができる。そのことをしっかりとマスターをすることによって、実は結果的にオリンピアンの成績が良くなっているんです。これは私自身が強化本部長のときに、パラリンピアンから学んだことを、そのままオリンピアンにどのようにしっかりと明確に伝えていくか。今は、やはり選手たちというのは、医科学的な根拠に基づいて説明をすることによって、日本の選手は真面目なもんですから、今は休みなさいと言っても、なかなかさぼりたくないと思ったりするんですね。でも、朝に起きて自分自身の一番低い脈拍が、ちなみに私は中距離、長距離タイプだったので、一番低いときの脈拍というのは1分間に45でした。これが鍛えていくと200まで上がるんですね。こうやって短距離選手というのは、1分間に大体60ぐらい打つひともいますけれども、でも朝目覚めたときにその頻拍数より10拍以上とか多くなって目覚めると、疲労が取れていないのでやっても無駄なんですね。

これをスポーツ医科学センターができたことによって、科学的な根拠を基に休むときはしっかりと休む、食べるときは食べる、寝るときは寝るというふうにして研究をした成果を、選手たちは自分自身が学んでいるものですから、ものすごく効率のいいトレーニングをするようになりました。そして、そこに付いているスポーツドクター、これは全ての分野のトレーナーが、お医者さんが付いてくださっているんですけども、そこでお話ししたいのは、スポーツドクターが私たちに付いてチーム医療を組んでもらう。全力で予防医療・予防医学だけがをさせない、病気をさせないというふうにして頑張ってやってくれるんですね。ドーピングがあるから薬は飲ませられない、こういう方たちが地域医療に帰るとすぐ薬を出します。これは、医者としてさぼっていないかと、いつも言いますね。でも、診療報酬は、そこで私は変えていったほうがいいと思うんですけども、やっぱり対症療法というのはスポーツの世界にはあり得ないです。町を挙げて、国もそうなんんですけども、やはり都市を挙げて市町村が、それぞれの地域医療を考えていくときに、対症療法ということではなくて、地域の医療というものを完全な予防医療・予防医学と、健康寿命を延伸するという視点で医療というものを確立していくことによって、そして今、私たちがスポーツを中心に医療や福祉や介護や、あるいは素晴らしい食文化、地場産業、芸術、伝統、教育、そして環境や観光というものを、あの三角の点から、一つ一つの産業を詰めていって、SDGsの丸を描いて、そして新しい産業を構築させて雇用を生んで、今までにない私は経済というもの、産業というものを築いていく、そのことの姿が実はオリンピック・パラリンピックなんですね。

これから、いかに心豊かで持続可能な社会をつくり上げていくということは、過去に例を見ないオリンピック・パラリンピック、そして成熟した国家としてやるべき姿というのは、世界が注目をするこの東京大会や、あるいはそのレガシーとして札幌大会というふうになっていくことによって、ただ単にオリンピックというのはスポーツの祭典ではなくて、今この地球上が抱えている温暖化であったり、あるいは食の問題や感染症の問題やエネルギーの問題。そういう世界が直面する大きな課題に先進国家として、東京大会を機に全てのこの問題を科学技術や、素晴らしい日本的心文化というおもてなし文化も含めて、問題を解決

するための最大限のヒントというものを、この大会でしっかりと世界に発信をする、それが私は東京大会の役割だと思っております。

東京オリンピック、56 年前の経済大国になっていく日本の姿の起爆剤になった東京大会とは、また違った姿を描いていかなければいけない。いかに心豊かで持続可能な社会をつくりしていく、そのレガシーを、この東京大会で担当大臣として、しっかりと医療やあるいは食、スポーツ、全てにおいてトップランナーとなる日本である姿を目指していくためにやっていきたいなというふうに思っております。

ちょうど時間がまいりましたので、終わらせていただきますけれども、スポーツとまちづくり、まさにスポーツということだけではなくて、国家の威信を懸けた経済と、そして文化力の戦いに変えるということに、スポーツを置き換えていく時代がもう来ました。そのことを、ぜひ各指定都市の皆さん方に、それぞれの都市でのスポーツと健康というものを、まちづくりのテーマとしてやっていただくことによって、持続可能な社会をつくり上げていくことになるなというふうに思っております。私も全力を尽くして担当大臣として頑張ってまいりますので、よろしくお願ひ申し上げます。きょうは本当にありがとうございました。